

二〇〇二年

「信徒の友セミナー」朝の祈り

『信徒の友』二〇〇三年二月号掲載

《一日目》

「北海道の地から」

皆さん、北海道・旭川によろこそ。

この地の美しく波打つ丘に広がる畑、大空にそびえる大雪山を望む、美しい風景を楽しみにして来た方も多いことでしょう。しかしこのあたりに和人が住むようになったのは一二〇年ほど前からで、それまでこの丘陵はすべて深い森に覆われていました。

「その昔、この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児のように、美しい大自然に抱擁されてのんびり楽しく生活していた彼らは、真に自然の寵児、なんと幸福な人たちであったでしょう。・：夢破れて幾十年。この地は急速な変遷をなし、山野は村に、村は町にと、次第次第に開けていく。・：その昔、幸福な私たちの先祖は、自分のこの郷土が末にこうした惨めなありさまに変わろうとは露ほども想像し得なかったのでありましょう。」

旭川に住んだこともあるアイヌ民族の天才少女、知里幸恵さんが残した『アイヌ神謡集』の序文です。この北海道はアイヌ民族のふるさとであり、「くに」でした。美しく広がる丘の畑は、アイヌ民族の生活圏であった深い森を根こそぎにして和人が作り出した風景です。私の住む旭川もアイヌ民族を追い出して作った町であり、昨日から皆さんがおいしくいただいている食べ物を生み出した大地も海もアイヌ民族から奪い取ったものなのです。

「あなたたちは自分で植えたのではないでしょう畑とオリーブ畑の果実を食べている（ヨシュア記二四・一三）」。イスラエルの民がカナン之地に入り、先住民を殺し、追い出して、その土地と実りを手に入れると告げられている箇所です。聖書の文脈では祝福の言葉として記されているのですが、私はそこにただ祝福とは言い切れない響きを感じます。「あなたたちは人から奪ったもので食べていくことになるのだ」と言うのです。これは他人事ではありません。私たちは人から奪ったもので生きていくのです。

北海道の日本海沿岸は、江戸時代から昭和初期までニシン漁で賑わい、漁場ではアイヌ民族や全国から流れてきた低賃金労働者「ヤン衆」たちが奴隷のように酷使されました。

大量に水揚げされたニシンは肥料に加工され、日本全国に運ばれました。お集まりの皆さんそれぞれの故郷の田畑にも北海道のニシンが少なからず埋められているはずですが、それと共にアイヌ民族やヤン衆たちの血と汗と涙がしみ込んでいます。私たちの先祖は、それらを吸って養われた田畑の実りを食べ、生きてきたのです。

戦後の北海道には、植民地からの引揚者や焼け出された都会の人々が大量に移住し、また食糧難の時代、食糧や石炭の増産が期待されました。日本の戦争のツケを北海道が負わされたのです。しかし、高度成長期になると、工業製品を輸出する代わりに食糧やエネルギーを輸入する政策がとられ、農業も炭鉱も一転して切り捨てられ農村や産炭地はどんどんさびれていきました。日本の経済発展は、北海道の痛みの上に成り立ってきたのです。最近のBSE問題でも北海道の農家は大変厳しい状況に置かれています。牛肉だけでなく、つけあわせのタマネギも売れなくなりました。安い輸入品との競争で疲弊した農家に重ねての打撃です。皆さんは、今日の献立は何にしよう、牛肉は怖いからやめよう、安なもの、安いものをと選んで選んでいるかもしれません。しかし、それが回りまわって北海道の農家を苦しめるのです。いったい誰

が悪いのでしょうか。

「人に迷惑をかけたくない」とよく言われますが、実はそれは大変傲慢な言いではないでしょうか。私たちは、生きていくために人から奪い、人を傷つけ、苦しめ悩ませることをどうしても避けられません。人に迷惑をかげずに生きることなどできないのです。「罪」「原罪」をいうとき、私たちが抱えるこういう苦しみ、辛さ、悲しみを抜きにすることはできないのです。

しかし、またひとつの言葉を心に留めます。「人はそれぞれ自分のぶどうの木の下、いちじくの木の下に座り、脅かすものは何もない」と万軍の主の口が語られた（ミカ書四・四）」。戦争の時、あるいは搾取と横暴がまかり通る時、農民たちは自分のぶどうやいちじくの実りを口にすることができません。しかし、いつか自分の木の下に安心して座り、脅かされることなくその実りを口にする平和な時がきつと来る、という希望の言葉です。この希望を信じたいのです。私たちは、人と人が傷つけあい、奪いあい、苦しめあう現実の中にいます。けれどもなお、絶望ではなくて希望があると主は告げるのです。

この地で生まれた私の子たちには日本語とアイヌ語両方の意味をもつ名をつけました。人と人が共に平和に生きる希望をこめ

た名です。

皆さんをこの地にお迎えし、共に祈る時を持つのは嬉しいことです。多くの人々が共に生きる、平和の希望を祈りましょう。私たちは、人から奪い、踏みにじり、傷つけ、悩ますことなしには生きていけない、みじめな罪の存在にすぎません。しかしそれでもなお主は希望を与えてくださいます。私たちのどうしようもない罪を主に告白しつつ、なお、そんな私たちが平和のために用いられるようお願い求めましょう。

《二日目》

「土の器の教会」

私ども旭川豊岡教会は、この日曜に創立百周年を祝いました。その歴史の中で、教団の「隠退教師を支える運動（百円献金）」の発祥の教会となったのは特筆されるべきことでした。

教会員に、学校教師だった牧田健夫さんという方がいました。生きていけば百歳、教会と同年になります。かつて牧田さんは教団新報の「ある隠退教師が生活苦のため教団に相談してきた。しかし教団年金の受給対象にならないと言われ、肩を落として帰って行った」

との記事に大変心を痛め、隠退教師の方々を支えるため毎月百円の献金を教会に呼びかけました。それが道北地区壮年会で取り上げられ、やがて北海教区から教団全体へと広がっていったのです。

旭川豊岡教会の前身、メソジスト旭川教会時代に前後2回赴任したのが三上豊牧師でした。最初は大正デモクラシーの風潮の中、戦前の教会が最も盛んな時期でした。牧田健夫さんもこの時代に三上牧師から洗礼を受けています。

一九三五年、三上牧師が旭川に再任された時はうってかわって厳しい時代でした。「大戦の最中、特別な篤信家、老人、小児にあらざるかぎり教会に背を向け役員会どころではない。小生は四月早々会計を委嘱された。Y翁の遺言により毎月七円を領収、若干を足して牧師館にお届けするのみであった。他は日曜日も午前中は毎週学校に出勤して事務を取った。小中学生は日曜日礼拝に出たと後に聞いた」と牧田さんは振り返っています。

「筆者も役員とは名のみで、皇民教育の練成に務め、あまり教会を顧みなかった。しかし牧者は教会の空地に野菜を作りながら、常に温顔をたたえ会員宅を訪ねた。役員を訪ねて運営を議し、一方中央の要請に応えるなど、方途を尽くして教会にあられた」。

戦中戦後の厳しい時代を経て三上牧師は健康を害し、敗戦から一年半後の一九四七年一月、牧師館で亡くなります。栄養失調、ありていに言って餓死というべき状態と伝えられています。このとき牧田さんは枕元に駆けつけ、痛恨の涙を流しました。役員の任にありながら教会をないがしろにし、恩師を死なせてしまったことは、牧田さんの心に棘となつて残りました。

私たちの教会は弱くもろい教会でした。世の中に追い風が吹くときは教会も意気盛んでしたが、厳しい風にさらされると散り散りになつていきました。「当時を振り返つてみると、吾人の信仰生活も一朝戦争有事の内ともなれば、たちまちにして崩壊するもろさであつたことは残念な次第であつた」と牧田さんは記しました。

聖書に「私たちはこのような宝を土の器に納めています(コリントⅡ、四・七)」とあります。教会は、激しく揺さぶられると粉々になるもろい土器のような弱い器でした。私たちの教会だけでなく、日本の教会全体が風に揺さぶられたあの時代、そういうもろさをあらわにしてしまつていたのでした。

先ほどの文章の中に、三上牧師が「一方で中央の要請にも応え」とあります。当時の北海教区の記録に「戦時宗教報国会が北方緊急

軍土建工事に率先垂範挺身して二千名の宗家を動員するにあたり、日本基督教団教師は全員これに参加する」とあり、三上牧師の名前も挙げられています。当時の日本基督教団は戦争への協力を強いられ、それに従いました。国家の力の前に、教会がもろく弱い土の器にすぎなかつたことを直視しなければなりません。

あの時代、役員として教員として責任を果たせず、牧者を死なせてしまったとの思いを抱え続けた牧田健夫さんは、後に私財を投じて教会の中に「三上記念会」という基金を設けて三上牧師遺族を支え、さらに先ほどのエピソードをきっかけに隠退教師を支える運動を提唱しました。「これは私の戦争責任告白です」と言つていたといひます。

「一粒の麦は地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが死ねば多くの実を結ぶ(ヨハネ一・一二・三四)」とは、もちろん主イエス御自身を指す言葉です。しかしここに、主イエス・キリストに従う私たちの生き方も示されていると思ひます。死と滅び、徹底的に打ちのめされ損なわれることを通して、私たちはよみがえり、新しい命、永遠の命へ到る、そう信ずるべきではないでしょうか。

私たちの旭川豊岡教会は、百年の歴史を刻むことを許されましたけれども、主の前にあ

まりにふさわしくない土の器にすぎなかつたことをうなだれて告白せざるを得ません。にもかかわらず主は、土の器の私たちを不思議に用いることができるのです。痛ましくも死んでいった一人の牧師、そしてまたその出来事を痛恨の棘として痛みを抱え続けた一人の信徒の働きは、今も豊かな実りをもたらしています。

私たちは、自分自身と、そしてまた教会が抱える弱さ、もろさ、罪を主の前に率直に告白する者でありたいと思ひます。そして、そういう死と滅びの器を、なお、よみがえらせ、新しい命を与え、生かしてくださいと信じているのです。

久世そらち

旭川豊岡教会牧師(当時)